

平成26年6月3日(火)

老球の細道⑱

『世界で通用するために』

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

東京オリンピックを前にして、歴史を変える使命感に心を高ぶらせている人はたくさんいることだろう。かつて同僚だった登山家のH先生から教えていただいた今は亡き世界的な登山家・小西政継氏の言葉を思い出す。

「現在の実力が三流だから三流の目標、三流のクライミングしかできないという消極的な発想ではだめだ。実力不足でも目標は超一流に定め、これをとらえる計算をし、全力を挙げて努力する積極性をもつことだ」

「本当に強くなりたいのだったら、垂直の岩と氷の中で烈風や吹雪にたたかれろ。これは誰だって避けたい苦しみだが、この大自然の猛威との闘いの中から本物の実力が生まれてくるからだ」

「常にその登頂の成功を世界のレベルで価値判断しろということだ。日本人初登頂で鼻高々なんてのは島国根性の典型だ」

バスケットボールにおける私達のスタンスも常にこのようでありたい。人は自分が考えたようにしかできない。世界で通用するプレーヤーになるためには、広い世界で活躍できる人間になるためには、小西氏のように考え、小西氏のように行動することだ。

かつて会津にも来たこともある陸上競技3段跳びの世界チャンピオン、ウイリー・バンクス氏は次のようなことを言っていた。(旧学鳳高校体育館でのツーボールダンクを記憶している人は何人いるだろう?)

「日本の選手がなかなか世界一になれない背景として、四つの日本文化の特色があるように思える。すなわち、自己に対する過小評価、失敗に対する恐れ、目標を高く設定することへのためらい、個々の勇気の不足、の四点である」

世界レベルを目指す人たちは、今後、この四つの課題を克服していかなければならない。

①自己に対する過小評価

優れたアスリートは自分に対して自信を持っており、自己の能力を最大限に発揮している。自信なくして試合を支配することはできないし、相手に打ち勝つことはできない。

「24時間私は私である」。バスケットボールをやっている時もそれ以外のことをやっている時も変わらぬ気持ちで同じように行動できる。だから自分で自分を信じることができる。自信とは読んで字の如し。自分で自分を信じることである。自分を信じられる日常生活と科学に裏付けられたハードトレーニングを毎日コツコツと積み重ねていけば、自分を過小評価することなど考える余地もない。

②失敗に対する恐れ

大多数の人は失敗をおかすようなことはしたくない。いつも一歩下がってしまう。もし勝てなかった場合にも何らかの言い訳ができるように。場合によっては勝利に挑戦することさえ放棄してしまう。トップになるために敗れ去る危険をおかすよりも、名声はないが無難なところにいたいのである。成功するためには常に敗北というリスク(失敗)を負わなければならない。そのリスクに打ち勝つからこそトップになれる。

③目標を高く設定することへのためらい

日本人には建前と本音がある。内心ではチャンピオンになりたいと思っているのに、周囲の目を気にして何も言わないことが多い。とはいえ、本当にチャンピオンになりたい人は、自分の信念を表明するのに周囲の目を気にしたりはしない。高い目標を持たないと、チャンピオンになるために欠かせない苦しい困難なトレーニングはこなせない。真のチャンピオンは生活のすべてをその目標に向け、目標を達成するために何でもする。

④勇気の不足

日本の社会は「出る杭は打たれる」という言葉があるように、普通であることからはずれたことをしようとする人たちに対して冷たい。このことが、目標に向かってガッツに進もうとしている人の勇気をそいでしまう。負けてはいけない。日本のアスリートの多くは「平均」でいることに満足しているが、これは、勝利を目指す者、夢を成し遂げる者が絶対に避けなければならない姿勢である。引込んだ杭は腐ってしまい、悔い（杭）が残る。出過ぎた杭は打ちようがない、抜きん出るだけである。

世界への道は限りなく遠くて、厳しい。しかし、今日の一步で近づく。